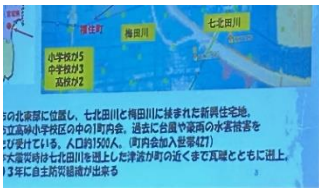


開催地名	富山県高岡市
開催日時	令和6年2月25日（日） 13:30 ～ 15:00
開催場所	ふくおか総合文化センター Uホール
語り部	大内 幸子 （宮城県仙台市）
参加者	防災士、市防災担当課 192名
開催経緯	被災経験が乏しいため、行政・住民ともに災害に対する危機意識が低い傾向にあるが、県内には多数の断層帯や急流河川が存在し、また、県域を急峻な山々に囲まれているため、地震や洪水・土砂災害の危険性は高く、防災意識の醸成が急務となっている。 また、自主防災組織の人員のほとんどが男性であり、女性視点の防災対策の推進が求められている。
内容	（1）福住町の防災・減災の取り組み 福住町は、二つの川に挟まれた町で過去に台風や豪雨の水害被害を度々受けていた。特に1986年の台風10号で甚大な被害に見舞われた。数々の災害から『自分たちの町は自分たちで守る』という思いで2003年に自主防災組織を発足した。 まずは活動として、住民の安否確認のための名簿が最優先で必要と感じ、要支援者と住民全員の名簿作成を行なった。高齢者宅の家具の転倒防止金具の取り付けや、更には仙台市内外の町内会・市民グループとの『災害時相互協力協定』を締結した。普段はボランティア活動や夏祭り、イベントなどで住民のコミュニケーションの構築に努めている。これがいわゆる『福住町方式』と言われる様になるが、防災に絶対大丈夫という事はないので、今も試行錯誤が行われている。 （2）東日本大震災の記憶 地震の揺れは、とても長く自宅の中はぐちゃぐちゃな状態になったが、普段の訓練通り担当者が町内要支援者の安否確認を行い、小学校にもすぐに向かい、全員の無事を確認した。ライフラインがストップしてしまったので、その後すぐに避難所の開設を行い、まずは手作りトイレと災害時瓦礫置場の設置をして炊き出しの準備も遂行した。 高砂小学校には500人分の備蓄品の用意があったが、近くに駅があったので帰宅困難者が加わり約2000人に避難者が膨れ上がったため、赤ちゃん連れの母親には早くに用意が整った福住町集会所へと誘導した。（福住町集会所には120名が避難）実際、避難してくる人の約8割は支援が必要な災害弱者と呼ばれる方々であった。 （3）震災で感じた事 災害の規模が大きければ大きいほど公助には限界があるので自助・共助の取り組みが必要であると感じた。日常の取り組みと訓練が災害時に力を発揮するが、福祉、救護、

	防災、減災などの専門的な知識がないと行動出来ないと感じ、仙台市地域防災リーダー（SBL）認定や、女性のための防災リーダー養成講座受講を経て、仙台女性防災リーダーネットワークを立ち上げ、東日本大震災の教訓と人の命の大切さ、備えなどを全国に発信している。 （４）震災後の取り組み 震災時、とにかく水とトイレに困ったのでその教訓を活かして仙台市では、道路に埋没している水道管の空気弁を、災害時に応急給水所として利用できる様に改良した「災害時給水栓」を今では10割に近い数を指定避難所である学校に設置した。他にも津波避難タワーの設置。しかし、津波の想定区域が昨年変更になり、やはり、これで大丈夫、なんてことは無いという事を実感した。 地域独自の防災訓練や夏まつりなどの楽しく面白いイベントを通して、小さい子供から年配の方、クリニックの先生など様々な地域住民のコミュニケーションの構築、普段からお互いの顔、存在を知る事も大事であり、顔の見える関係が減災に繋がると考える。特に地域と子供たちと一緒に防災訓練は、将来の地域の町づくりや人づくりの大きな支えとなると考え、また災害の履歴を伝える事もとても重要であるため、今は口伝に努めている。 防災は日常生活そのものであり身近な事から取り組む事が大事であり、まずは自助、共助と出来るだけ行政に頼る事なく『地域の力』を最大限に活用する事が求められる。世界で起きている自然災害の1割は日本で起きていて、いつでも災害は起こってしまう。普段から災害が起きた時と取るべき行動を家族と話し合い、持続可能な防災・減災の取り組みを継続する事でいつか役に立つ時が来ると考える。  この北東部に位置し、七北田川と阿田川に挟まれた新興住宅地。立地高小学校区の中1町内会。過去に台風や豪雨の水害被害をたびたび受けている。人口約1500人。（町内会加入世帯47）大震災時は七北田川を遡上した津波が町の近くまで瓦礫とともに遡上。13年に自主防災組織が出来た。 
開催地より	講師が、地域で自ら防災活動を実践しておられるお話を聞き、改めて、「自分たちのまち自分たちで守る」と再認識する機会となった。市としても、地域で行う防災訓練がより実践的なものとなるよう、助言・支援していきたい。